経営学史研究の「哲学スル」について
―村田晴夫「文明と経営―その研究の方向―」に即して―

村田康常

19 世紀末のタヒチで、ポール・ゴーギャンは、文字通り生命を賭けて取り組んだ大作に、文明社会を根底から問いただすような3重の問いを書き込んだ。

「われわれはどこから来たのか、われわれは何ものか、われわれはどこに行くのか（*D'où Venons Nous Que Sommes Nous Où Allons Nous*）」（1897-8 年、油彩、ボストン美術館蔵）

村田晴夫が言うように「哲学スル」ということが、徹底して問うことであるならば、まず問われるべきことは、「何がそのように徹底して問うに値するか」ということだろう。そして、ゴーギャンが来るべき 20 世紀に向けて問いかけたこの 3 重の問いは、現代社会に生きる私たちが徹底して問うに値するような問いであるだろう。

村田晴夫の論考の基本的な立場は、「20 世紀文明は近代科学技術を本源とする企業文明である」という洞察にある。「企業文明（組織中心社会、管理社会、情報化社会）」の主要な要素である企業・組織・管理・情報を主題とする学として 20 世紀に登場したのが経営学である。このような視座に立てば、経営学はまさに「企業文明の学」であり、経営学史研究は「企業文明の学の歴史」を主題とする知の営み（学的な営為）だということになるだろう。この文明社会において、「われわれはどこから来たのか、われわれは何ものか、われわれはどこに行くのか」を徹底して問うことは、経営学史研究の主題でもあるのだ。
経営学史研究の意義をこのように理解すると、経営学史研究における「哲学スル」ことの意味が（少なくとも私には）少し明確になってくる。経営学史研究における「哲学スル」とは、私たちあるいは私たちの現代文明社会はいったい何もので、どこから来て、どこに行くのかを徹底して問うことなのだ。

村田晴夫は、「哲学スル」ということについて、「根源的なるものについて徹底的に考える」というソクラテスの対話的な知の活動を継承するものだとしたうえで、「哲学スル」という知の活動ないしはアクチュアリティを次のようにまとめている。

> 経営学史研究において「哲学スル」とは、以下の精神活動を言う。ただし 5 項目中、
> 第 1 項目は必修で、他の 4 項目はそれぞれの目的に合わせて選択すればよい：
>
> ①自ら徹底的に問い、徹底的に考えること。②～⑤は必要に応じて取捨選択してよい。
> ②人間とは何かを問い、よく生きることに向けて問うこと
> ③世界の有りようの本質を問うこと、すなわち世界観の徹底的吟味
> ④思惟の自由、学問に対する学（学の学）、「思惟」に対する思惟、を推進すること
> ⑤現実化への精神の場所：哲学の精神としての思索を形あるものに育てること（村田晴夫レジュメ p.4）

ここで言われている「哲学スル」とは、過去の哲学者（と呼ばれている人）の遺した著作や生涯などを研究することではない。簡単に言えば、「哲学スル」とは、必須とされる第①項目で言われているように、「徹底的に問う」ということ、つまり、「底に徹するまで問うこと」、根底を問うこと、村田晴夫の言葉では「根源的なるものについて徹底的に考える」ことである。

そこで問題になるのが、Fallacy of Misplaced Concreteness（具体性置き違えの誤謬）である。特に、④「学の学」として「哲学スル」場合に、つまり、「学」の根底に徹するまで問う場合に、具体性を置き違える誤謬が、おそらく3つの意味で、問題になる。

1）これまでに登場したそれぞれの経営学体系は、「具体性を置き違える誤謬」に陥っていないかどうかが、徹底して問われる。ある経営学体系が具体性を置き違える誤謬に陥っているとすればその学問体系のどこで、どのように、なぜ、またどこまで深刻に、この誤謬に陥っているのか。

2）個々の経営学ではなく、企業文明の中核となる組織や管理や情報などを問う経営学そのものに、「具体性を置き違える誤謬」が（ある意味で不可避的に）付きまとっているのではないかが問われる。そもそも、学問一般が、具体性を置き違える誤謬に（ある意味で不可避的に）陥り続けているのではないか、と問い続けることが、「学の学」としての「哲学スル」という知の営みだろう。言い換えると、具体性を置き違える誤謬に絶えず陥りつつある経営学が、そのことを自覚して繰り返し自らの学の限界と抽象性を明らかにしようとし続ける、という知の動揺が、「学の学」として経営学を徹底的に問う経営学史研究の「哲学スル」というあり方だといえるだろう。

3）企業文明そのものが「具体性を置き違える誤謬」を抱えているのではないか、という問いが立てられるだろう。企業文明の最大の特徴である企業の活動あるいは組織の活動は、経営学を学的基礎に据えている。その経営学が絶えず「具体性を置き違える誤謬」に陥りつつあることと、現代の企業文明そのものが「具体性を置き違える誤謬」を内包していることとはおそらく密接に関連している。言い換えると、われわれは、具体性を置き違える誤謬に絶えず陥りながら、そのつど「哲学スル」という知の

営みを通して、そのことに自覚的になることで、自らの学の限界と弱点を自覚し、そしてそのことを通して、文明社会の核となるような知の体系を絶えず相対化しつつ新しい知を開拓し、そのようにして少しずつ前進（あるいは「進化」？）しているのではないか。

この3つの「具体性を置き違える誤謬」の意味に沿って、3つの問いが経営学史研究に対して提起されるだろう。また、より根源的と思える1つの問いが「哲学スル」に対して提起されるだろう。

①　経営学における抽象とはどのようなものなのか。また、経営学における具体とはどのようなものなのか。
②　企業文明が抱える「具体性を置き違える誤謬」を指摘し、解明し、方策を提示し、より良い価値を実現する活動の理論的根拠を提供する学として経営学が機能しているとしたら、そのような経営学もまた「具体性を置き違える誤謬」を内包しているということは、大きな問題となるのではないか。
③　そもそも、私たちの知の営みは、徹底すればするほど、「具体性を置き違える誤謬」から離れられなくなるのではないか。この誤謬の中を、それでも進んで行くのが学的な営みだとすれば、この誤謬の中で、自らが誤謬に陥りつつあるのではないかと絶えず吟味する「学の学」としての「哲学スル」ということは、経営学に限らず、どの学問領域にも必要なのではないか。

④「哲学スル」ことの具体性と抽象性が問われるだろう。言い換えると「哲学スル」という知のアクチュアリティもまた、その活動の中で抽象的なものを具体的なものと見なしてしまうような誤謬に絶えず陥っているのではないかが問われるだろう。そして、「哲学スル」という営みは、私たちが「具体性を置き違える誤謬」に陥っていることを警告し、自覚させ、そのことによって、私たちがこの誤謬の中にあっても前進（あるいは「進化」？）しているのだという希望の根拠となっていたのではなかったか。誤謬に陥りつつあることを自覚させる「哲学スル」という知の営み自体が、絶えずその誤謬に陥りつつある（かもしれない）としたら、知の前進性を私たちは確信できるのか。